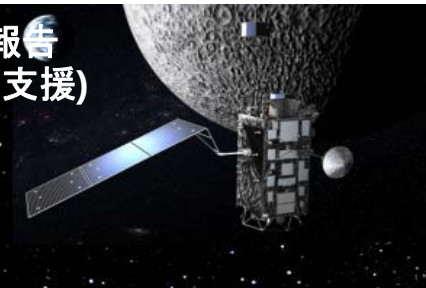


地震電磁気観測衛星国際ワークショップ開催報告 (宇宙航空研究開発機構(JAXA)主催、当財団支援)

page1



平成20年2月29日、JAXA主催による標記ワークショップが開催され、内外から約60名の参加があった(うち外国人研究者17名)。日本でも地震電磁気現象に関するワークショップは数多く開催されてきたが、衛星観測に焦点を絞ったワークショップはこれが初めてである。

最初に小山孝一郎・元宇宙科学研究所教授/現在台湾国立中央大学客員教授が、日本の科学衛星「ひのとり」及び米国の科学衛星DE-2で得られたデータに現れている地震の電離圏への影響に関する発表があり、電離圏研究の新しい展開に対する期待を述べられ、日本の電離圏研究者諸氏の更なる努力を強調した。基調講演の上田誠也東海大学教授による地震予知研究の歴史と現状に関する発表では、昨年11月、アテネ大学のバロストス教授らによりPRLに投稿された論文で予測された、2月14日にギリシャで発生した地震の予知成功に関する報告もなされた。特別講演の早川正士電気通信大学教授からは、旧宇宙開発事業団が実施した地震リモートセンシングフロンティア研究とその後の進展に関する報告がなされた。

午後のセッションでは最初にJAXAの児玉が、世界の地震電磁気観測衛星の現状と、宇宙理学委員会小型科学衛星ワーキンググループで検討中のELMOS計画について紹介し、内外の研究者の参加を呼びかけた。続いてロシア宇宙庁傘下のAEROKOSMOS副所長セルゲイ・ピュリネッツ博士が、旧ソ連からの研究の歴史と衛星観測結果、将来計画及びロシアの新しい地震予知体制について、ウクライナ科学アカデミー宇宙科学研究所のヴァレリー・コレパノフ博士が、3機編隊によるIONOSAT衛星計画を、フランス地球物理研究所の大西健夫博士が、DEMETER衛星データの解析結果を発表した(今月のGRLに統計的な地震前兆信号の存在を示す統計的な解析結果の論文が掲載された)。

中国地震局地震予測研究所の孟国杰博士からは、第11次五ヵ年計画中に打上げ予定の中国地震電磁気観測衛星に関する発表が、台湾国立中央大学の劉正彦教授からは、GPS-TECの膨大な統計的解析結果の発表があった。最後に同大学の柿並義宏博士から、地震に伴う電子温度低下の現象と、その発生機構に対する考察を試みた発表があった。

総合討論では、未だ電離圏への地震前駆現象の決定的な伝達機構は不明であるものの、各国の地震電磁気観測衛星の信頼できる観測結果の集積が、地震前駆電磁気現象の立証につながることで議論が一致し、地震火山国の宇宙機関として実施すべき将来ミッションの認識を新たにした。最後に、日本学術会議の深尾昌一郎東海大学教授より、日本の衛星計画に対する激励の言葉をいただいた。

地震電磁気観測衛星国際ワークショップ開催報告 (宇宙航空研究開発機構(JAXA)主催、当財団支援)

page2



本ワークショップとの共催で、翌日開催されたアジア域宇宙地象天気国際ワークショップも極めて盛況であった。このワークショップは第一日目のワークショップが主に電離圏への地震の影響を議論したのに対し、地上観測に集中した報告がなされた。電離圏観測と地上観測の両方の報告をプログラムに組み入れるという今回の試みは、両分野の研究者の将来の共同研究に極めて有意義で、近い将来同じようなワークショップを開催したい旨の意見が参加者から聞かれた。

本ワークショップ開催にあたり(財)宇宙科学振興会をはじめとして、アジア学術会議、九州大学宙空観測センター、千葉大学、東海大学地震予知研究センター及びEMSEV/IUGGから御支援を頂きました。心より御礼申し上げます。ワークショップ開催準備及び開催中にお手伝いいただいた宇宙科学研究本部の石川美穂さんと利岡加奈子さんに、この場を借りて御礼を申し上げます。

地震電磁気観測衛星国際ワークショップのアブストラクトは以下のサイトで公開の予定です。
<http://www.sems-tokaiuniv.jp/semsweb/IWSEOS2008.html>
(報告者:小山孝一郎・児玉哲哉)

